



ニュースレター

ニュースレター第100号発行に寄せて

グリーフワークかがわ理事長

杉山洋子

このたび、ニュースレター第100号を発行するに至りました。当法人の前身であるグリーフワーク・かがわ時代のニュースレター第1号発刊から8年以上の歴史の積み重ねでもあります。これまでご寄稿いただいたみなさまと編集にご協力いただいたみなさまにあらためて感謝申し上げます。

第1号を発行した2004年当時を振り返ると、市民団体としてグリーフワーク・かがわとしてのスタートを切り、初めて事務局専用電話を契約し、担当者が携帯するようになったこと、会の運営を議論する定例会（役割的に現在の理事会と相談担当者会議の前身ともいえる会議）を毎月開催し、会議の場をそれまでの香川県合同庁舎の会議室から高松市女性センター（現在の高松市男女共同参画センター）へ移したことで、ホームページを開設したことなど、それまでの「グリーフワーク研究会」時代の礎から大きく踏み出した時期でした。グリーフワーク研究会発足当初は、香川県精神保健福祉センターの組織育成事業としてのご支援をいただき、会場も県合同庁舎の会議室をお借りしていましたので、活動拠点を高松市女性センターに移すための登録団体としての手続きひとつを取りあげても、自立の高揚感と心細さを経験していた記憶が甦ります。

その後、2009年11月にNPO法人の認証を取得し、特定非営利活動法人グリーフワークかがわとして、啓発、人材育成、教育研修、相談の事業に取り組んでまいりましたが、最近でもときどき「悲しい経験を話すことだけでは、人は元気にならないのではないですか」という質問を受けることがあります。このことは、まだまだグリーフワークの過程を阻む地域社会の問題があることを示唆しています。悲しんではいけない、取り乱した感情を見せてはいけないと、自分自身にも言い聞かせ奮い立たせてしまう根強い文化があります。喪失体験のあとの新しい生き方を見出していくために、悲嘆の作業が必要であること、そしてその作業は、その人のペースがあり、妨げてはならないことを、地域に発信していく必要を感じています。

さて、最近、私がある職場で相談業務に従事している人たちの研修を担当したときの経験をお話したいと思います。これは、私にとって、一人ひとりに内在する回復力を信じて、それを引き出すことが、いかに大切であるか、あらためて考える機会にもなりました。研修では、まず仮想事例を提示しました。次に、この事例のイメージを広げるために、受講者に、クライアントとなんらかの関わりがある人物を一人ひとり挙げてもらいました。そして、研修会場を舞台に見立てて、クライアントをはじめこうした人々との関係を形で演じてみることにしました。クライアントとの心理的距離は物理的距離で示され、身体の向きや腕の伸ばし方などで情緒的関係性が表現されていきました。最初は、あらかじめ事例に明記されている人物がキャラクターとして登場しましたが、次第に「ここには書かれていないけれど、友だちもいるよね」とイメージが広がっていきました。

結果として、参加者10数名がすべて、なんらかの関係者として役割を持ち、私が想定した以上の数の人物が登場しました。クライアント役の人は、個々の関係者に向かって「お父さん、今は、向こうをむいていてほしいけど、もうちょっと時間を置いたら近づいてほしくなるかもしれない」とか「友人Bはもっと、こっちを向いていてほしい」と、それぞれの位置と向きを変更していきました。その体験の後、

あらためて場面を変え、相談場面のロールプレイが開始されました。私も参加しながら、受講者全員で造形していくダイナミックな光景は、まるでパフォーマンスアートのように、変化の可能性を秘めた人々の物語を見ているようでした。

もし、ひとりの人が、行き詰ったと感じてここにおられるとしても、決してその人はひとりでここに留まっているのではないこと、仮にいま気づいていなくても誰かと繋っていること、その人が望ましい方向に変化していける可能性は無限に広がっていること、そして、その可能性の源は、その人自身の歴史のなかにあること、これらは、クライアントとの協働作業を進めて行くときに忘れてはならない視点だと思います。

私たちは、これからも「地域でグリーンワークを」を目標に、積極的に事業をすすめてまいります。支援の姿勢としては前のめりにならぬよう、地道に研鑽を積んでまいりたいと思います。そしてこのニュースレターについては、今後、広報と啓発事業の一環として掲載記事について検討してまいりたいと考えております。これからもいっそうのご支援をよろしくお願いいたします。

(2012年8月15日)

《お知らせ》

グリーンワークかがわ相談担当者会議が発足しました。

2012年7月15日の準備会を経て、相談担当者会議の発足が決まりました。

現在、グリーンワークかがわでは、相談事業としてグループミーティングと電話相談を実施しております。相談事業の実務担当者が、定期的に協議の場を持ち、相談事業の実施状況の把握を行い、必要な研修や教育を企画及び運営することにより相談事業の質的向上を目指すとともに、法人が運営する他事業との有機的な実施体制の促進を図ります。

相談担当者会議として理事会との連携を密にし、現場からの声として理事会に意見具申を行い、グリーンワークかがわの活動のさらなる活性化を目指します。

相談担当者会議

開催日：毎月第3日曜日 午前10時から11時30分

会場：高松市男女共同参画センター会議室

対象：認定グリーンワークカウンセラー登録者、認定ヘルプラインカウンセラー認定者

毎月、会議担当者から、メールとニュースレターで翌月の開催のお知らせいたします。

第1回相談担当者会議

日時：2012年8月19日（日）10:00～11:30

会場：高松市男女共同参画センター 第2会議室

★ グリーンワークかがわ事業紹介のちらし、プロシユール、PRカード完成 ★

グリーンワークかがわの事業を紹介するプロシユールとちらし、グループミーティング、ヘルプラインかがわ電話カウンセリング、自殺予防ホットラインかがわ各事業のプロシユールとPRカード(名刺判のサイズ)が完成しました。近々に関係機関への発送作業を行います。

第 39 回理事会が 7 月 15 日に開催される

<報告事項>

- ①電話カウンセリング従事者事前研修会-自殺予防ホットラインかがわ電話相談従事者事前研修が 7 月 8 日の 13 時～15 時、GW 相談室において行われた。
- ②プロシユールの完成について 4 種のプロシユール 3 種の PR カードが完成したと報告があり チラシ (A4) を 2,000 部印刷することになった。

<審議事項>

1. 相談担当者会議について

7 月 15 日午前 10 時より準備会が開催され、会議名は「相談担当者会議」に決定した。

毎月第 3 日曜日の 10 時～11 時半に定例化されることが承認され、今後、相談担当者の育成・養成・研修・教育について本会議で協議し、柔軟に対応していくことで了承を得た。

2. 2012 年度ヘルプラインカウンセラー養成講座開催について

相談担当者会議にて引き続き協議し、柔軟に対応していくことで了承を得た。また、新しい人材育成については、当面、教育担当理事からの指導・助言の下に新体制を整えていくことで了承された。

3. 会員対象意向調査について

会員の積極的活動参加を促す目的で「意向調査票」を実施することで了承された。

4. 基金事業に関する報償費の扱いについて

活動規程の一部改正に説明があり了承され、2012 年 7 月 15 日付で施行されることで了承された。

5. 現任者継続研修に関する規程について

研修実施要領はグリーンワークかがわ グリーンカウンセラー研修規程と名称変更がなされ、2012 年 7 月 15 日付で施行されることで了承された。また、グリーンワークかがわ ヘルプラインカウンセラー研修実施要領については 2012 年 7 月 15 日付で施行されることで了承された。

6. 倫理規程(案)と相談員倫理綱領(案)策定について

倫理規程の策定に関して承認を得、相談員倫理綱領に関しては一部加筆の上、策定が了承された。

7. 技術援助について

地域支援ネットそよ風(徳島市)からの依頼で 11 月 17 日に理事長がグリーンワークの研修を行うことで了承された。

8. 広報について

理事長より PR を積極的に行う旨の提案があり了承された。

9. グループミーティングに参加された方からの苦情について

担当者から事実確認をおこなったうえで、理事会と相談担当者会議で報告がなされることで了承された。

第 7 回(平成 24 年度第 1 回)公開セミナー

「絵本を通して喪失を考える(第 2 弾)」報告

平成 23 年度 1 月 22 日に開催した第 5 回公開セミナー「絵本を通して喪失を考える」の第 2 弾である。

『おじいちゃんがおばけになったわけ』、『悲しい本』の 2 冊の絵本を使った。読み聞かせのあと、2 冊の本の類似点と相違点をグループに分かれて話し合ってもらい、発表してもらった。

類似点より相違点が多く挙げられた。グループから出された内容とこの絵本に表現されている内容を使って、喪失について考えた。

特に、喪失を体験した人がとまどう故人に対する「怒り」や言葉としては同じ「喪失」でも個々の体

験を重視することの大切さを絵本を通して理解してもらうように努めた。

今回は Freud, S. の論文である『悲哀とメランコリー』やウォーデンの『悲嘆カウンセリング』からの引用により喪失に伴う感情の変化や身体症状についても言及した。さらに、子どものグリーフワークについて、体験したことを語り受け入れられる環境の大切さについても話をした。

前回同様、大きな喪失を経験すると、その混乱を処理するためにエネルギーの大半が内的な作業に使われ、社会適応に必要な外的なエネルギーが不足してしまう状態になることを説明、カウンセリングだけでなく、生活の支援などの援助がその人の大きな助けになることも述べた。

会場より、友人のお孫さんが亡くなり、どのように声をかけたらいいかという質問があった。会場からは友人が夫を亡くした際に、何も声をかけることができなかったが、度々家に足を運び、友人の様子を家族に確認していたところ、友人から当時のことについて何も言ってくれなくて嬉しかったという経験が語られた。講師からは故人に対してその人がして来たことや故人が行きっていた頃にその人に対して語ったポジティブな言葉を話すのも1つの方法であることを伝えた。しかし、一番大切なことは目の前の大きな喪失を体験した人が今どういう状態にあるかを考えること、個々に応じた対応である。参加された方々の喪失についての考えが深まったのではないかと考える。

(文責: 第7回公開セミナー担当講師 曾利 真弓)

8月の予定

- 8月12日(日) 10:00～ グループミーティング
- 8月12日(日) 13:00～ 第38回理事会
- 8月19日(日) 10:00～ 第1回相談担当者会